

# 小さい人たちの活動の作り方 基礎1

元宮城県美術館教育普及部長

齋 正弘 (齋 G)

10歳はだいぶ大きいように思えるが、10歳は生まれてまだ120ヶ月しか経っていない。人間の社会に出てきて、まだたったそれしか経っていないのだから、基本的にうるさくて、話を聞かなくて、扱いが面倒なのは当たり前だ。でも生まれた時にこういう騒々しい性質を霊長類人間は持っているのだから、私たちは、地球の上でここまでやってきてこうなれたのだということ、常に忘れないようにしたい。

という基本的立場に立って考えれば、教え、育てること(教育)は、小さい頃にだけできるように思える。言葉を使って、ものを考え、理解し、世界観を意識的に広げていくことが自分でできるようになってしまえば、教育は、順位付けや、権威付けや、誰かに(だけ)都合の良い評価などが中心になってきて、その人が立派な霊長類人間の成体になるための教育とは実はあんまり関係なくなってしまうように見える。その人自身より、その人に関わる人の戦い?に、知らないうちになってしまう。だからそうなる前、彼らにまず教え/伝えなければいけないことは、言葉というものがあることとそれを知ることによって広がる世界の楽しさと多様性だけなのではないか。

最近、僕にはどうもこの順番と方向が逆になっているように思える。日本人とか地球人とかはいざとなったらやめられるが、私が人間であることは止められないのだ。私たちは近代に生きているので、宇宙のどこにしよう、自立した立派で良い人間でなければいけないことに気づいた。自立も、立派も、良いも、それぞれ概念がその人、その時や場所によって違うが、それも肯定的に含めて、各々がそうなることを目指して教育は行われる。

10歳以下=自我形成以前の時期に、彼らと個人的に行われるある行動だけが、教育というもののように僕には思える。なぜなら、彼らには、まだ言葉による知識の伝達蓄積より、行動にだけ頼る生き残りの知恵/本能だけがあるからだ。まだ、優秀な霊長類でしかないうちの生き残りの練習を手助けすることだけが、教育と言えるものなのではないか。しかし、なので、話を聞かず、自分の動きたいことだけをやみくもに見つけ、動き回るあの人達との教育的な活動は、私たち

自身がついこの前までそうだったにもかかわらず、ひどく難しそうだ。

彼らにとって、言葉は意思伝達のメインツールではない。彼らは、私たち(大人)が言ったようにではなく、私たちがやったようにしかやらない。よく見ればわかるが、初めから悪い子供はいない。その子供の周りに、そういう時にそういう風に動く大人がいるので、彼/彼女はそういう風(悪い人間のように)に動くことが多くなるのだ。

さて、自覚以前の人間幼体という時、こういうことを知らないうちに大きくなってしまっていた霊長類人間の成体=私はどのように活動を方向付ければいいのか。僕は、まず端末に走らないことに注意する。うまくいかないことも多いが。

私たちの身の回りには物事の本質の端末をめぐる知識が溢れている。溢れすぎて本質が見えなくなるほどだと思った方がいい。そして私たちの今の世界では、その端末情報を持っている量の多い方がお利口であるかのように扱われることが多い。そしてますますこの本質は、それら端末によって覆い隠されていく。

という自覚を基に、僕の子供達との活動は組み立てられていく。最初、彼らの相談に乗ることの積み重ねから始まり、その積み重ねの蓄積で変化して活動は見えるようになる。そういう活動だから、内容の説明が難しい、というより、日本の教育的な概念や方法説明のための言葉ではできないことが多い。

彼らがやりたいことの本質をまとめ、そこで一緒にやれる事に引き戻し、自分が何にドキドキして今に至っているかを整理する。そして今、この歳になって、何に/をどのように反省し後悔しているかを、できるだけ周りとの人間関係などを取り払って整理する。そのあたりで、ほぼ見えてくる景色が、その時そこで行われる彼らとの活動になる。例えばそれが、今年、神社の裏の森で行われている活動になる。

